

明日が終業式です。

12月24日（水）

長かった2学期も明日が終業式（最終日）です。冬休みは12日間となります。明日持ち帰る通知表を前に、親子の対話をしっかりと行ってください。評定（5.4.3.2.1）だけで評価せずに、教科ごとの観点にも目を通していただき、1学期から伸びた点や今学期に頑張った点はしっかりと褒めてあげてください。子どもにやる気を持たせるために、それぞれの家庭で工夫をされていると思いますが以下のような記事がありましたので参考にしてください。



～ここから～ 日頃、高校生に対して、1対1でコーチングを行うことがあります。主なテーマは、「進路」についてです。志望校をどこにするのか、受験勉強にどう取り組むのかを話し合います。いろいろなタイプの高校生がいますが、時々、かわいそうになるぐらい悲観的なお子さまもいます。「受かるかどうか不安」「このままではどうせ無理」「自分にはできない」など。具体的に成績や状況などを聴いていくと、それほど悲観するものでもないのですが、「どうしてそこまで否定的に考えるのだろう？」とこちらまで悲しくなってきます。高校3年生Aさんとのコーチングで、Aさんはこんなことを話してくれました。「私は、『自分是可以できる』と思ったことなんか一度もないです。だから、大学も受かる気がしないです。自信がまったくないんです。ほめられたことなんかありません。テストで95点とっても、『どうして、あと5点取れなかったの？』と小さい頃から親に言われてきました」。辛そうに話す姿を見ると、いたたまれない気持ちになります。95点分もできたところがあるのに、できなかった5点について言われたことを、Aさんはずっと忘れていないのです。保護者のかたは、Aさんに「満点をとる力があるのにもったいない」という期待を込めておっしゃった言葉かもしれません。しかし、この言葉がずっとAさんを苦しめ、自己否定感を増幅させてきたのだとしたら、お互いにとって不幸なことだと感じます。私の知人Bさんの息子さんは、中学生の頃から、学校にあまり行かなくなり、高校にはなんとか入学しましたが、成績はまったく芳しくなかったそうです。それでも、自分でやりたいことを見つけ、調理師の資格を取り、夢だった自分のお店を持って、イキイキと仕事をする社会人になりました。Bさんは、当時をふりかえって、こう言います。「学校ってすごいところだなんて。だって、うちの息子、あんなに学校に行ってなくて、テストが0点でも、通信簿では『1』をくれたんだよ！私、嬉しかった。『1』ってすごくない？『0』じゃないんだよ！」このような発想ができるBさんの息子さんだからこそ、自分で道を見つけ、夢を叶える力を持った大人へと成長されたのかなと思います。「ないもの」「足りないもの」を指摘されると、自分の存在価値が感じられず、自己否定が強い大人になってしまいます。「ないもの」を考え続けても、親も子どもも力づけられません。「あるもの」に目を向け、それを認識していくことで、より幸せな大人へと成長していけるのではないのでしょうか。さて、高校生Aさんのコーチングの話に戻りま

す。私は、Aさんの苦しい気持ちを受けとめた上で、最後にこう伝えました。「Aさんのお話を聴いていて思ったんだけど、1分ぐらいの間に、『ない』っていう言葉を5回ぐらい言ってたね。『できるって思ったことない』、『受かる気がしない』、『自信がない』、『ほめられたことがない』、だから、『自分にはできない』って」。Aさんは、ハッとしたように顔をあげて、私の顔をじっと見つめ返しました。私は続けてこう伝えました。「『ある』ものを言ってみたらどうか？『今日、時間通り、ここに来た時間管理能力がある』『断ることもできたのに、ここに来た行動力がある』『自分の気持ちを正直に人に伝える勇気がある』『わかりやすく伝える表現力がある』『将来のことをこうして考える機会がある』とか」。Aさんは、最初よりは明るい表情で、「まず、『ある』のつく言葉に変えてみます！」と言って帰っていきました。お子さまの中の「あるもの」に焦点をあて、「ない」のつく言葉を減らしていくと、お互いにエネルギーが湧いてくるのがきっと感じられます。

○昨日の丹波市中学校数学教育研究部会(公開授業の様子)



○各学年2学期のまとめ活動の様子

